



訪問支援に行き詰ったときや途方に暮れたときに読み返してほしい本

評者 ● 伊藤正俊

特定非営利活動法人から・ころセンター

こころの扉が開く ひきこもり状態にある 本人と家族への訪問支援

著・船越明子／斎藤まさ子 発行・医学書院
定価・2750 円（本体 2500 円＋税）

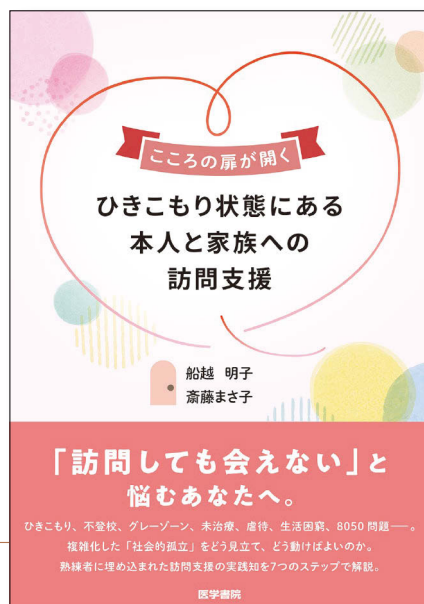
私自身、娘が小学校 4 年生から学校に行くことができなくなった際、親として何がどうなっているのか分からなく苦しんだ経験があります。その苦しみの原因の出口を、手探りで少しずつ進んできた当時の自分を振り返ると、当時本書のような手引書があったなら、どんなに心強かったらうかと思えます。以下では、本書のポイントを、私なりに解釈も含め、お示ししていきたいと思えます。

社会的認識の変化と本書の立ち位置

2000（平成 12）年前後と比較し、現在では「ひきこもりは特別なことではなく、誰にでも起こりうる」という認識が広く浸透しました。支援の現場も、医療支援中心からソーシャルワークとしての支援へ、そして本人に「寄り添い続ける」ことで「自律」を促す方向へと変化しています。2025（令和 7）年に厚生労働省が発表した『ひきこもり支援ハンドブック～寄り添うための羅針盤』もこの流れを汲んでいます。本書はさらに一歩踏み込み、「その人なりの社会とのつながり」までを訪問支援の中に包括していることは特筆すべき点です。

本書の構成と内容について

本書は第 1 部から第 3 部で構成されています。第 1 部では「ひきこもりの基礎知識」、第 2 部では「熟練支援者のノウハウ」、第 3 部では「困難事例への



の応用」が解説され、特に第 13 章では支援を受けた当事者が、自分なりの社会参加に至るまでの道程が丁寧に示されています。

訪問支援から始まり「その人なりの社会とのつながり」を達成するに至るまでを通じて、ひきこもり支援において最も大切な基本は「自己決定に基づく支援」であることです。本書はその変わらぬ基本理念を軸にしつつ、熟練支援者の経験や、元ひきこもり経験者等の機微に触れる出来事も網羅されています。これほどまでに実践的かつ丁寧に構成された書籍は、他に類を見ないのではないかと思います。ご家族や支援者、ピアサポーターの方々は本書を常に傍らに置き、支援に行き詰ったときや途方に暮れたときに本書を読み返すことで、新たな視点を見出すヒントを得られることでしょう。

なお、本書を読み進めるための TIPS として、訪問支援に日が浅い方は、2010（平成 22）年に厚生労働省から出ている「ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン」を読んでから本書を読み始めた方が、より理解が進み支援に役に立てられるでしょう。それとともに「生活困窮者自立支援法」や「障害者総合支援法」などの法律の知識も参考になるのではないかと思います。

最後に、ここまで丁寧に解説された本書を書き上げられた、船越明子先生、斎藤まさ子先生はじめ、協力されたさまざまな方々に深く敬意を表します。